

ドキュメンタリー番組「ケータイ依存」を見て

携帯メールに依存する17才の少女の日常を追ったドキュメンタリー番組「ケータイ依存」を見た。

自転車・歩行・電車の移動中、カラオケ中、食事中、トイレ中でも携帯を離さず頻回にメールし、「一秒でも返信を早くしたいから」と携帯を離すのは眠っている時だけ。

依存症研究の専門家が少女の協力で実験してみると、前頭葉の波形はメール中はフラット。携帯を取り上げると波形は活性を示し、携帯を戻しメールし出すと再びフラット。

この専門家は、携帯依存になると、相手の表情、雰囲気を読み取る前頭葉の働き（推理、意志、思考、等）が次第に鈍くなり、コミュニケーション障害に陥ると云う。

最近、携帯による危険性（いじめ、勧誘、出会い系）等から、携帯の使い方を青少年に教える必要性が叫ばれているが、それよりもコミュニケーションとは何か、どういうことかを話し、気づかせることの方が大事な気がしている。

授業で「携帯メールは、コミュニケーションの切っ掛けにはなるが、コミュニケーションそのものだと錯覚するなよ！」と話している。

「コミュニケーションとは『会話』と云われるように、互いの顔を見ながらの想いの伝え合いのやりとりである。

やりとりとは、言葉のもつ意味だけでなく、また、互いの背景が異なるのだから、相手の表情、相手の発する言葉の音のイントネーション等、たくさんの手がかりがあってこそ相手の想いを推測できるのであり、それらに対応したやりとりを工夫してこそコミュニケーションになり得る。

その工夫しながらの螺旋的やりとりの過程で、アイデンティティが育まれる。」と話している。

先の秋葉原事件の犯人は、メールで犯行直前に「今から人を殺す」と発信しても、「止める！」と誰からも返信がなく、自分はやはり社会から疎外され、孤独だと思い決行したと言う。

そんなに人との係わりを望んでいたのであれば、不特定者相手のブログでなく、「日頃から顔の見える周りの人々との係わり合いのやりとりを、自分なりにどう工夫していたのか？」と聞きたくなる。

人との係わり合いの工夫が面倒だからと自己中の世界に閉じこもっていたのでは、アイデンティティが育まれるはずがないという例とも云えるかなと思う。

「コミュニケーションとは、面倒さを伴うもの」と、まず覚悟して工夫に心懸けましょう！